

▽参考文献▽

- ①『国語教育指導用語辞典 第四版』（教育出版）
- ②『国語授業を変える「用語」』（文溪堂）
- ③『カラーワイド新国語要覧 増補第三版』（大修館書店）
- ④『改訂版新総合国語便覧』（第一学習社）
- ⑤『広辞苑 第5版』（岩波書店）
- ⑥『これだけは身につけたい国語科基本用語』（明治図書）
- ⑦『実践へのヒント 国語科授業用語の手引き 第二版』（教育出版）
- ⑧『類語新辞典』（角川）
- ⑨『国語辞典』（旺文社）
- ⑩『夢の国語教室創造記』（東洋館出版社）
- ⑪『小学校 子どもが生きる国語科学習用語』（東洋館出版社）

1 説明的文章の指導に関わる用語

（1）意味段落 同じ内容の形式段落のまとまり。同じ主語が連なっているまとまりが意味段落で、主語の変わ目が意味段落の区切り目になる。

（2）要点 形式段落の中で筆者が述べようとしている主要な内容。形式段落内の重要な文や言葉を短い文まとめたもの。

（3）要約 文章全体のあらましをまとめること。まとめたものを要約文といい、段落（意味段落）の要点を、段相互の関連を考えてつないだもの。

（4）序論、本論、結論（はじめ、なか、おわり） 文章を基本的な3つの部分に分けて考えるときの、各部の名称。序論と本論が「具体」、結論が「抽象」の関係にある。

（5）要旨 文章全体の中で筆者が述べようとする考えの中心となるもの。主張ともいう。文学作品の主題にある。

（6）文章構成図 意味段落の接続関係をもとに、文章全体の構成を関係図として表現したものを文章構成という。

☆（5）、（6）→参考文献①・②

2 文学的文章指導に関わる用語

(7) 設定 (時、場、人物) 物語全体に関係のある、「いつ (時)」「どこで (場所)」「誰が (人物)」について説している部分。設定の多くは、冒頭部分で紹介される。

(8) あらすじ 文章や話の大体的内容を短くまとめたもの。展開を中心としたまとめであり、流れに直接関係ない場面や出来事は省略される。登場人物の行動を中心にまとめる方法のほか、登場人物の気持ちに注してあらすじをまとめることもある。

(9) 登場人物 物語に出てくる人物。動物や物でも、人間のように話したり、動いたり、自分の意思で行動すものは登場人物といえる。

(10) 中心人物 物語の冒頭と結末で、考えや心情、行動が大きく変わる登場人物。中心人物の様子や気ちの変化や成長などによって物語は展開していく。心情や行動が大きく変わる人物が複数いる場合は地のに着目し、語り手が寄り添う人物を探す。

※「主役」・「主人公」と同義の場合もある。

(11) 対人物 中心人物に対して重要な役割や特別な人間関係を持つ登場人物。中心人物を大きく変えさる。中心人物を助けたり、支えたり、影響を与えたりする。

(12) 語り手 お話や物語などを語る人物。話者ともいう。語り手は作者ではない。

※お話の地の文で「私は〇〇した。」などと書かれていれば、語り手は「私」。

(例) 『我が輩は猫である』では、語り手は「猫」。

(13) 視点 物語の人物や様子、出来事を語る語り手の立ち位置。

「一人称視点の物語」…話者が「私」として登場する物語

「三人称視点の物語」…話者が基本的に登場しない物語

- ・三人称限定視点…ある決まった人物の心を描く。
- ・三人称全知視点…主な人物すべての心を描く。
- ・三人称客観視点…誰の心も描かない。

(『“夢”の国語教室創造記』(二瓶弘行)東洋館出版社)※『ごんぎつね』のように、途中で視点が転換するものもある。

☆ (7) ~ (13) → 参考文献②・⑥・⑪

(14) 地の文 文学作品などで、会話以外の説明や語りの部分をいう。

※大きく分けて「説明」と「描写」の2種類がある。「説明」は情報を伝えるのが目的で、「描写」は対象となる報を表現することを目的とする。

(15) 説明と描写 説明は、物語の設定や様子、ある一定時間の出来事などを客観的にわかりやすく述べたの。描写は、具体的な設定 (時・場) の中で起こる事件 (出来事) や様子を詳しく書いたもの。

※人物描写 (行動描写、心理描写、性格描写、肖像描写、せりふ描写)、自然描写、情景描写などがある。

(16) 事件 (出来事) 物語の中で起きたこと。

※いくつかの事件が繋がって物語になる。事件ごとの小さな変化が繋がって、中心人物の大きな変容

つながる。つまり、中心人物の変容の原因となるのが事件であり、これが物語の伏線ともなる。

(17) 変容 場面の様子の移り変わりとともに変わる人物の心情の変化のこと。

※物語は、最初と最後で中心人物が大きく変容している。

(18) 情景 心情と景色が一体になったもので、①場の様子（風景）を表す、②登場人物の心情を表す（心を象する）の2つの意味がある。

(19) 基本構成 中心人物がどのようなことに出会って、どのように変容したのかという物語の流れ。

※とらえ方としては「起承転結」「6つの点（①冒頭、②発端、③山場の始まり、④クライマックス、⑤結末、⑥わり）」「三部構成（はじめ、なか、おわり）」がある。

(20) 叙述 物事の事情や書き手の感情・考えなどを書き記すこと。または、それらを書き記したもの。

※書き記し方の違いによって、「説明」と「描写」の二つに分けられる。

(21) ファンタジー 一つの作品世界の中に現実と非現実の二つの世界が存在している物語のこと。

※中心人物が現実世界から非現実生活に入っていく展開と、何かが非現実世界から中心人物のいる現実界にやってくる展開とがあるが、いずれも現実と非現実の行き来にスイッチが必要。

☆ (14) ~ (21) → 参考文献①・②

(22) 山場 山場は、物語の四つの部（冒頭・展開・山場・結末）の中で、もっとも緊迫した場面。

(23) クライマックス クライマックスは、山場の中の最高潮の一点。物語において、感想や緊張が最も高まる分。

※中心人物の心情や様子が一番大きく変容したところで、主題が一番強く現れている。

クライマックスの条件…①描写の文、または会話文、②一文で書き抜ける、③心情が大きく変わる場所、視点転換のすぐ後

☆ (22)、(23) → 参考文献②

3 詩の指導に関わる用語

(24) 詩 散文的法則に縛られない表現方式。

※「内容による分類」

叙情詩：主観的情調を直接的に表現

叙景詩：自然の原風景の描写

叙事詩：歴史的事件、英雄の事跡。事柄を扱った「もの・こと」の詩。

「形態・形式による分類」

散文詩：詩的精神につらぬかれた散文

自由詩：文語定形詩を除く詩の総称。口語自由詩。

定形詩：和歌、俳諧につながる伝統的な形式。リズムカルな語感の中に叙情を包もうとする

☆ 参考文献①・③・④・⑤

(25) 外在律 五七調や七五調のように規則的な音数配列（音数律）によって作られるリズム・調子のこと。

⇒(対)内在律：詩の外部（形式・音数律・韻など）からではなく、作者内部の詩的発想・表現などが生じさせリズム

○五七調：力強く重厚な調子、暗い感じ

○七五調：流麗で軽快な調子、明るく弾んだリズム

☆参考文献②・③・④

(26) 連 詩の意味を考え、何行かをまとめて、内容上のまとまりを作ったもの。

※いくつかに分かれているときのかたまり。連と連の間は一行あける。一つ目のまとまりを1連、二つ目を2連・・・と数える。物語の段落にあたる。

☆参考文献②

(27) (詩の)語り手 作品全体を語り進める人のこと。作品の世界を説明したり、人物の心を語ったりして、作品界の案内人の役目をする。

※物語においてはほとんどの場合、語り手と作者は違い作者が第三者を語り手として設定して作品の世界案内していく。しかし、詩の場合は、詩人（作者）が語り手の役目をしていることがほとんどである。

☆参考文献②

(28) リフレイン 同じ言葉や文を2回以上繰り返し使う表現技法のこと。「繰り返し」「反復法」ともいう。同音・同句反復、類語・類語句反復などがある。リフレインには、読むときのリズムを整えたり、部分や全体のリズムをったりする働きがあり、音の響きをよくする。また、強調の効果があり、そこには作者の感動が現れている。語手や人物の心情の強さや高まりを示し、作者の意図や強調したいと思うところが強化されている。

☆参考文献②

(29) 声喩・オノマトペ・擬声語・擬態語 声喩とは、「音や声」「様子」などを文字で写し取った言葉。オノマトペは、擬声語・擬態語の総称。時に擬声語のみを指す場合がある。

※オノマトペは、そのものの音声や様子、状態を生き生きと具体的に描写でき、読者の感覚（視覚、聴覚などに働きかけて、実感を持たせることができる。同じ言葉が2回繰り返されて使われることも多く、詩に独特なリズムや言葉の響きを生み出す。擬声語とは、実際に生じる「音や声」を文字で写し取った言葉。片仮名記が一般的である。擬態語とは、人物や物の「様子」を写し取った言葉。平仮名表記が一般的である。

☆参考文献②

4 その他、国語科全般に関わる用語

(30) 言語 発信者が受信者へ伝達する手段。

※伝達手段には、音声と書記がある。

※伝達内容には、①感情や意欲などの情緒的内容②ことやものなどの意味内容がある。

(31) 語句 言語の基本となる単位のこと。語、句、熟語の総称。

※語とは、「空、走る、美しい、しかし、が」など。句とは、「腹をたてる、顔が広い」などの慣用句。熟語とは「月日、本箱、起き上がる」などをいう。

(32) 語彙 語句のあつまり。一つ一つの語句をバラバラにとらえるのではなく、何らかの有機的な関係を持つ集合する統一体のこと。

※例えば、英語語彙（英語）、身体語彙（身体の部分を表す言葉）理解語彙（知っている言葉）、使用語彙（すときに使う言葉）などがある。

(33) 読解 文章を読み、読者の既有知識や情報、経験を手がかりとして、書き手が伝達したい情報を理解し、積すること。

(34) 感想 ある物事に対して心に感じ思うこと。

☆ (30) ~ (34) → 参考文献①・②

(35) 音読 文章の内容を理解することを目的とし、声に出して読むこと。

(36) 朗読 聞き手を意識し、文章の内容を表現することを目的として、声に出して読むこと。

☆ (35)、(36) → 参考文献⑦

(37) 基礎・基本 活用、応用するための土台となる知識や技能。

※例えば、国語科の基礎・基本とは、ひらがなやカタカナ、漢字などの文字を正しく書くこと、読書に親しむと、相手や目的に応じて説明したり、話し合ったりすること、手紙や報告をまとめること、要点や要旨を読取ることなどがある。

☆ 参考文献①・②

(38) 単元 学習目標を達成し、児童に能力を身に付けさせるための一連の学習活動のまとまり。

※何を軸として考えるかによって、教材・教科単元と生活・経験単元（トピック単元、課題単元も含む）に大き分けられる。

※教材・教科単元…教材の価値体系に中心を置く単元。児童の興味関心よりも、児童に求められる必要に点を置いた単元。代表例は教科書の単元であり、ときには教材としてとられた作品名が単元名となることある。

※生活・経験単元…ここでいう経験とは、児童の社会生活上の経験ではなく、児童の言語生活や言語活動に基盤を置く。児童の興味関心を尊重した児童中心の単元。

※この他、「聞く・話す・読む・書く・あるいは表現と理解の言語活動」における技能の習得を直接にめざし練習単元が考えられる。

☆ 参考文献①・⑥

(39) テキスト 国語教育の学習指導において、「記録」可能なもの、利用可能なもの全般教科書、板書やノート発表、硬筆毛筆などの「肉筆」、スピーチなどの「肉声」など、テキストとして扱うべきものは無限に近いという。

☆ 参考文献①

(40) 筆者と作者と話者

筆者…文章を書いた人。(説明的文章 実用的な表現 説明文・日記・手紙・感想文・記録文・報告文・生文・新聞・意見文・書画など)

作者…文章を書いた人(物語的文章、創造的な表現 物語・小説・詩・創作文・脚本など)

話者…文章の中で話を進めている人。作者が物語を語らせるために作った人物。

☆参考文献②・⑦・⑧

(41) 学習目標とめあて

学習目標…目標は単元や題材、教科全体を通した子どもの望むべく姿を書き出した総括的なもの。

めあて…学習を進めるにあたっての、一人ひとりの児童にとっての目標。

※目標をさらに各時限ごとに具体化したものがねらいであり、ねらいを達成するために児童が目的意識をつよように掲げるのがめあてである。

☆参考文献⑦

(42) すぐれた表現 説明、描写、語りなどそれぞれの特性が際立った表現(例:述べたいことが順序

正しく、理的に述べられている・音律的な快い調子を持っているなど)。

※表現技能でみると、誤字脱字がなく、ねじれのない文章や話し方。目的に適合した文章や話し方。

☆参考文献①・②・⑦

(43) 観点 物事を考察・判断するときの立場。見地(けんち)。多くを並べて見比べたり、広く見渡

した際の思の基盤。発想力や創造力といった思考力のスタート地点。目のつけどころ。

☆参考文献⑨